3 全日本郷土芸能協会の取り組み

1 「郷土芸能」とは

(1) はじめに

公益社団法人全日本郷土芸能協会（略称・全郷芸，以下全郷芸とする）は，郷土芸能の保存団体（団体会員）および郷土芸能に関心を持つ個人（個人会員）を会員とする，わが国で唯一の全国的な組織です。日本各地に伝承されている郷土芸能の振興と育成を図り，その発展に寄与することを目的として昭和 48 年（1973）に任意団体として創立し，平成 7 年（1995）に社団法人設立許可（主務官庁文部科学省），平成 24 年（2012）に公益社団法人の認定（主務官庁内閣府）を受けました。全郷芸は，郷土芸能に関する公演の開催，指導者，保存団体の育成，国際的な交流等の事業を行い，地域社会における郷土芸能の保存振興を図り，我が国の文化の振興と発展に寄与することを目的にしています。全国各地に今も伝わる郷土芸能の姿と活動を多くの方々に知っていただくこと，継承における課題や取り組みを会員間で共有し活用すること，郷土芸能との交流の場を生み出すことで継承の励みにし，さらなる発展へとつなげることを目指すネットワーク組織です。

(2) 郷土芸能とは

「郷土芸能」と聞くと，地方のお祭りなどで演じられる伝統的な踊りや歌を思い浮かべるかと思います。獅子舞や神楽，お囃子や盆踊りなど，地域住民によって行われる芸能です。学術界や行政などフォーマルな場では「民俗芸能」という言葉が使われます。民俗とは，民間の人々が日常生活の中で生み出し伝えてきたもので，民俗芸能も民間人によって行われています。さて，「郷土芸能」と「民俗芸能」，どちらもほぼ同じ意味ですが，全郷芸では「郷土芸能」という名称にこだわっています。“郷土”という言葉には，中央に対する地方の図式を想起させ，田舎くささ，古くささ，その地域の人だけによる閉鎖的なものといった雰囲気が漂います。一方で，生まれ育った地への誇りや愛情を，“郷土”には感じます。全郷芸は，地域（郷土）の風土と暮らしに密接に関わっていて，地域に住む・関わる人が，地域をよりよくするために行っている芸能を「郷土芸能」と呼びます。さらに“伝統的”であることもそれほど重要視していません。和太鼓（なぜ日本の太鼓なのに“和”太鼓と呼ぶのでしょう）のように歴史が浅いものや，よさこいソーランのような創作芸能，観光まつりなども，全郷芸では郷土芸能とみなし，会員になることができます。「地域のためになって，地域から理解され，根ざしている芸能」であれば郷土芸能である，としています。

2 全日本郷土芸能協会の創設と発展

(1) 大阪万国博覧会と全日本郷土芸能協会

全郷芸は昭和 48 年（1973）に創立しましたが，その種は大阪万博で蒔かれました。筆者が全郷芸職員として伝え聞いたこと，ならびに『創立 15 周年全日本郷土芸能協会・小史』（社団法人全日本郷土芸能協会，1989 年）をもとに，成り立ちを紹介します。昭和 45 年（1970）の大阪万博では，全国の祭り・郷土芸能が出演する催し「日本の祭り」が「お祭り広場」を会場に行われました。この「日本の祭り」プロデューサーたちと招聘郷土芸能団体の交流を継続・発展させるために任意団体として設立されたのが全郷芸です。

(2) 全日本郷土芸能協会の創立メンバー

全郷芸の任意団体時の創立メンバーは「日本の祭り」プロデューサー陣が中心で，郷土芸能に一

〈表 1〉 全日本郷土芸能協会の創設メンバー（1973 年）

野口　善春	演出家・振付家，日劇，東宝演劇部，全郷芸元理事長
三隅　治雄	民俗芸能研究者，東京国立文化財研究所
原　　浩一	演出家，松竹歌劇団，全郷芸元理事長
芳賀日出男	写真家，全郷芸元理事長
渡辺　武雄	演出家・振付家，宝塚歌劇団，日本郷土芸能研究会設立者
吉永　淳一	舞台・テレビ演出家，児童文学作家
飛鳥　　亮	演出家，松竹歌劇団
鈴木　昭良	芸能マネジメント
岡野　正昭	舞台演出家

『創立 15 周年記念 全日本郷土芸能協会・少史』（発行年・発行所）より

見関係がなさそうな，舞台やテレビの演出家，振付家，文学作家，興行師，カメラマンなどがメンバー（表 1）に見え，芸能を芸術的視点で捉え，公開するという意図が「日本の祭り」に込められていたことがくみ取れます。

ところで，上記演出家らは戦前・戦中にかけて，全国の郷土芸能の調査を大々的に行いました。芸能従事者の中心である若者が芸能や祭りで地域や人をまとめていく姿や，芸能が持つ人を惹きつける表現方法は，戦時中の国民の意思を集結する，国威発揚の礎になるものとされたからです。戦後，その資料や知識は，日本文化の復興と再創造に差し向けられるようになります。宝塚歌劇団の演出家渡辺武雄氏は，昭和 30 年代に郷土芸能をテーマとした民俗舞踊集という舞台を始めます。西洋に寄らない日本ならではの舞台を目指し，宝塚内に郷土芸能研究会を設立して，再び全国の芸能調査を開始します。こうした中，大阪万博が決定します。高度経済成長期の国力を内外に示すための文化政策だったこの万博の目玉は「日本の祭り」とされ，その総合プロデューサーに指名されたのが，渡辺武雄氏でした。

(3) 郷土から離された芸能を演出する

郷土芸能を地域外の舞台で演じてもらう場合，それが伝わる地域の雰囲気と離れすぎない見せ方を

写真①　つくば万博「日本の祭り」公演風景（1985 年）

考慮する必要があります。國學院大學の小川直之氏は，民俗芸能は神社や庭などの限られたスペースで見せるもの，あるいは演者と観客の親密な距離感の中で見せていくものだと指摘しています。

しかし，大阪万博の「お祭り広場」には，間口も奥行きも巨大な，見たこともないステージが設置され，演者と観客の距離の分断は不可避でした。郷土芸能の意味や地域性を損なわず，国内外に通じるパフォーマンス性を担保するため，プロデューサーたちは知恵を結集し，数々の「演出」に挑戦したことでしょう。照明や音響，アクティングエリアや時間の制限，紹介方法など，当時はまだ信仰心篤い時代，演者との壮絶なやりとりがあったことは想像に難くありません。制作においても，6 週間に亘る 60 以上の祭り・芸能を招聘するため，出演者・スタッフの数は前代未聞，交通・宿泊・食事などの資金確保は困難を極めたことでしょう。また，当時は演者の多くが第一次産業従事者で，万が一出演時期が繁忙期にぶつかるとすぐさま生活に支障が出てしまいます。演者に損が出ないよう綿密なスケジュールを組まなければならないそのプレッシャーたるや，想像するだけで生きた心地がしません。

当時の最先端を行くスタッフたちが作り上げた「お祭り広場」。この時積み上げられたノウハウは，今もなお郷土芸能公演におけるスタンダードモデルとして脈々と伝えられています。

当時の演者の多くは，今も全郷芸の会員として所属しています。「新しい演出に挑戦し，継承へ

のモチベーションが高まった」「多くの人に出会うことができた」という感想が語られる一方で，郷土芸能としてのあり方や価値観を変えてしまったことも否定できません。例えば島根県の「石見神楽」は，八岐大蛇が火を吹くなどエンターテインメント性が高い芸能として有名ですが，頭数の増加や技術的な演出は，万博での演出家の助言を取り入れたのだと，当時出演した有福神楽（島根県浜田市）のメンバーも語っています。

(4) 全日本郷土芸能協会の設立

「日本の祭り」では，出演芸能の多くが初めて地域の外に出て，縁もない人に向けて公演するという経験をしました。また，他地域の芸能と出会い，交流することも初めてでした。三隅氏は「民俗芸能というものは各々の地域で伝承されていけばいいというものですが，イベントというものを媒体として，民俗芸能がお互いを励まし合って伝承されるのだなと痛感（中略）又同じ芸能でも違ったグループが『日本のまつり』に一緒に出たという連帯感を持たせたことは大きな成果でもあったし，この連帯感を持続させたいという思いが，後の全郷芸創立への動きに転化していった」（全日本郷土芸能協会，1989 年）と語っています。渡辺氏は「この協会は昭和 45 年，即ち 1970 年に大阪千里丘陵で 6ヶ月に渡って開催された日本万国博 EXPO‘70 の残したたった一つの落とし子だったかも知れません」と大きな期待を寄せていました（社団法人全日本郷土芸能協会，1989 年）。全郷芸は，国内の郷土芸能の連帯感を高め，様々な課題を出し合い，乗り越えていくための任意のネットワーク組織として動き始めました。

3 全日本郷土芸能協会の活動

(1) 外に出る郷土芸能

万博の成功もあり，「郷土芸能」が世界に通用するものとして，一般にも理解されるようになりました。国としても日本特有の文化である郷土芸能を世界へ輸出し披露する動きが出始めます。万博で実績を作った全郷芸は任意団体ながら，芸能団の海外派遣や海外からの招聘において，イベントの制約や予算を考慮し，ふさわしい芸能をアドバイスするなど，国際的な芸能イベントの企画制作や演出を担っていくことになります。

写真②　平成 19 年度国際民俗芸能フェスティバル「フィナーレ」（2008 年 2 月 20 日，新国立劇場中劇場）

国内外の芸能を比較する舞台公演も，文化庁主催で毎年行われるようになりました。昭和 52 年（1977）から平成 6 年（1994）まで行われた「日本民謡まつり」「アジア太平洋うたと踊りの祭典」，昭和 60 年（1985）つくば万博「日本の祭り」，平成 23 年（2011）2 月まで続いた「国際民俗芸能フェスティバル」などは，全郷芸の制作によるものです。海外芸能の現地調査を実施して演出プランに落とし込み，新しい芸能の世界を日本国民に提示し続けました。

平成 7 年（1995）には社団法人許可，平成 24 年（2012）公益社団法人の認定を受け，国内外の芸能団体の保護・振興と課題解決に資する事業を行っています。

(2) 全郷芸の自主事業

子供が関わる郷土芸能を招聘した公演や指導者セミナー，ワークショップなど，次世代・後継者育成のための事業も積極的に実施しています。「全国こども民俗芸能大会」は，都道府県から推薦を得て，これまで 110 団体の子供が携わる芸能を東京に招聘しました。東京での披露が，子供の芸能継承への誇りや自信につながり，後継者育成

写真③　第 26 回全国地芝居サミット in とよた
（2015 年 11 月，愛知県豊田市）

に一石を投じる効果を生み出しました。後継者難という郷土芸能最大の課題解決のため，形を変えながらも子供に関係した事業を実施しています。

「全国地芝居サミット」は，各地で一般人が取り組む歌舞伎「地芝居」の連携と交流を目的に地芝居団体が伝承地を訪れ，公演鑑賞や共通する諸問題を取り上げる意見交換会を行っています。地芝居は，全国で 218 団体ほどが活動中という調査結果があり（文化庁，2015 年），最も元気な郷土芸能といえます。演者だけでなく裏方や音楽など関わっている人が多く，演目や衣装，道具など地域を越えて共通した話題でコミュニケーションが取れるのが特徴です。サミットでは，旅先で団体同士が楽しみながら共通課題を交換し合い，良いと思えば積極的に取り入れる柔軟性を何度も目の当たりにしました。地芝居の柔軟性，したたかさ，活力には，郷土芸能を長く継承していくためのヒントが隠されているように思います。

4 “郷土”芸能を見直す

私たちは，郷土芸能が単なる見せ物でも古くさいものでもなく，地域の様々な人が関わっている多様性の塊であり，未来あるものであることを信じています。忘れられかけていた，負のイメージにまみれた“郷土”という言葉が再び見直され始めたのが，2011 年の東日本大震災でした。広範囲に亘る津波や原発事故は，先祖から連綿と引き継がれてきた土地（郷土）を破壊し，汚しました。人々は，今まで当たり前のように足下にあり続けた郷土に目を向けざるを得なくなりました。そんな時，被災地で次々に芸能が再開していきました。仮設住まいで帰還もいつになるのか分からない中，住民を励まし，失くなりそうな“郷土”を繋ぎ留めようとしたのです。長年苦難に喘ぎ続けてきた郷土芸能に，まだこれほどまで力があったことに，私たちは奮い立たされました。全国にいる会員ネットワークを通じて，被災地の芸能の情報を収集・発信し続けました。その取り組みや姿は，こぞってマスコミに取り上げられ，芸能の重要性や多様さに気づいた人たちの支援が被災芸能に届けられました。「郷土芸能」という言葉が再び見直されたのです。“郷土”が，そこにしかない価値ある，魅力的なものとして再認識され，対中央との比較構造から脱した瞬間でした。

51 年前の郷土芸能は，日本の戦後復興をアピールするものとして取り上げられ，飛躍しました。半世紀が経った今，震災やコロナ禍は，人間関係や世代，地域との距離感を大きく変えようとしています。グローバルよりローカルな“郷土”の世界が見直されています。そんな中，50 年前と同じ役割と目的で，私たちは郷土芸能を続けていけるのでしょうか。続けることは，その郷土に生まれた人たちの思いや生き様を，次の代に伝えていくことです。今，私たちが伝えているものは，誰の，何のためのものなのか，今一度内省する時代に入っています。2025 年の「お祭り広場」がもしあるのなら，次の 50 年にどんなレガシーを残せるでしょうか。

【参考文献】

・『創立 15 周年記念 全日本郷土芸能協会・小史』全日本郷土芸能協会，1989 年
・俵木悟「八頭の大蛇が辿ってきた道―石見神楽「大蛇」の大阪万博出演とその影響―」『石見神楽の創造性に関する研究』島根県古代文化センター編，2013 年
・『「全国の地芝居（地歌舞伎）」調査報告書』，文化庁，2015 年
・中坪功雄「大阪万博の軌跡・五十一年目の証言・日本の祭りを考察する」『年刊藝能第二十七号』藝能学会，2021 年

（小岩秀太郎）